

現地研究会に参加して

脇 本 隆*

北海道草地研究会の現地研究会も第1回目の札幌近郊にはじまり、天北、根釧地域と毎年回を重ねて、本年は10月1日から3日間にわたり、渡島、檜山管内の草地を見学することになった。ほ場試験のシーズン中は他管内の牧草、草地を見学する機会はなかなか得られないので、この機会に根釧地域との差異を直接見聞し、比較認識を深めたいという期待を抱いて参加した。

毎年のように津軽海峡を渡るが、道南地方はその都度通過するだけで殆んど足跡を残したことがない。従つて、緩るい弧をえがく美しい内浦湾沿岸、秀峰駒ヶ岳を賞でながらもその山麓の荒涼さ、そして杉の植林や田園風影など北海道とやや異質な景観を呈する大野平野を印象づけている程度である。

道南地方は道内ではもつとも温暖な地方であり、比較的早くから開け、集落、米作、果樹園芸などの発達の様子がけとなつた地方であるので、本土から北海道への漸移地帯としての自然的、人文的特色に目をみはるものが多いことであろう。親しく道南の風物に接したいという長年の希望がようやく実現することになつた訳である。しかし、札幌出発以来、3日間、900Kmの現地研究旅行は絶好な天気恵まれ、美しい景観に心をうばわれて、肝心の見学がおろそかになつたことを先づ告白しなければならない。以下の感想記もかかる輩の駄文とお許し願いたい。

米 米 米

第2日目、仁山高原の大野町管牧野で道南農試小林場長から道南農業の概況を承つた。道南地方は北海道開発の扉の陰になつた中間後進地域だという。かつての渡島地方という呼称や現在の道南地方という表現も「オシマイ」とか「ドウナルンダ」という語感を伴うので南北海道という感慨で地域の向上を図つて行きたいとユーモアに話を進められた。この地方は春が早く、秋が遅いので本年のような気象でも水稻の冷害は極めて軽微であつた。一般に気象条件は良好であるが、経営規模が北海道でもつとも小さい地帯であり、兼業農家が多い。歴史的先進地域でありながら現在では後進地域にとどまつているが、現在扉を開ける努力が、施設園芸、良質米の生産そして草地開発による畜産振興に向けられているという。以上のようなお話の中で、農業構造の中における草地の立地背景をおぼろげながら理解し得た。

米 米 米

鹿部村の村営放牧場は駒ヶ岳東山麓の緩い傾斜地に位置し、深さ1mあまりの火山れきの上に200haの草地が広がっていた。造成は非常に困難であつたようだが、ケンタツキー31フエスク(優占)とオーチャードグラスが混生し、マメ科草種が見当たらないが見事な草地であつた。チモン一主体草地の2番刈は不可能であるという。表土が極めて浅く、地味の劣つた乾燥し勝ちな火山れきの草地であるから、適応草種の選定とその維持管理には独得な困難があることであろう。草地灌

* 根釧農業試験場

概の試みもあり、草地の高位生産を図るためにはこのような施設化を積極的に採り入れることが必要であろう。

大野町有牧野からの展望はすばらしかつた。駒ヶ岳、大沼、横津連山、大野平野そして函館山のパノラマが足下に展がる。この牧野は明治44年以来共同牧場として利用されてきた古い歴史を有し、標高700mにも達する道内で最も高所にある公共草地であるという。

配布の資料には主な草種として、オーチャードグラス、イタリアンライグラス、ケンタツキープリユエグラス、ケンタツキーク31フェスク、スムーズプロムグラス、シロクロバ、パーズフットトレホイルと多彩な草種があげられているが、草地の草種構成はどうであろうか。実際に草地に足を踏み入れることができず残念であつた。古い時代にはどんな草種が利用されていたのであろうか。道東にはみられないシバ草地が予備放牧用として利用されていた。5~10月の放牧期間中、頭数と草量がうまく一致しない、余つた草を乾草調製したいが高所のために調製不能ということをやががつた。47年以降大規模草地改良事業が計画され、道南を代表する最大の公共草地となるそうだが、この地域の草地の先導的な役割を期待したい。

大野から厚沢部、江差を通り上ノ国へ向う。檜山とは檜を産する山の意ではなく、ヒバの山でヒバに檜の字をあてたにすぎないという。ヒバを識別することはできなかつたが、附近の山は豊かな樹木におおわれていた。厚沢部川の狭少な流域に沿つて水田、畑が続いている。

上ノ国町の八幡牧場も古くから馬の共同放牧地として利用されてきたが、近年肉用牛繁殖育成センターとして運営されている。ここから江差方面の展望はすばらしい。主な草種はシロクロバ、ラジノクロバ、アカクロバ、アルファルフア、オーチャードグラス、チモシーで平均草量は30トン/ha、中には70~80トン/haの草地もあるという。1月の平均気温が-2.0℃、8月が22.1℃という恵まれた気象条件なので高収量も成程と思われるが、さらに温暖気候に適した草種の選定がのぞまれる。中央農試桜井畜産部長はベレニアルライグラスを指摘されていた。

当別トラピストでは場長さんの案内で畜舎や草地ばかりでなく、礼拝堂その他建物の内部も見せて戴き非常に感銘した。ここには祈りと労働の生活があるだけだという。農場は独立採算を旨とし、極めて集約的な経営が行われている様子で、隔世的と思われるこの農場でも新技術が積極的に採用されていた。労力の都合でコンサイレージをやめてグラスサイレージに切りかえ、その調製には最近の乳酸菌添加が試みられ、また自然風力乾燥機による乾草調製が15年前から行われているという。アルファルフアの栽培にも意欲的な意向を示されていた。

駒ヶ岳の曾田ジャロレー牧場の企業精神旺盛な経営に一驚した。ジャロレー牛は年中山に放牧しているそうだが、帯耕法的な技術で造成した急斜面の山の草地には到底行けず、草地に関する詳しい話も聞けなかつた。オーチャードグラス、チモシー、ラジノクロバを利用しているとのことであるが、草地管理が十分に行い得ないと思われる山の斜面に、しかも粗食に耐え得るといわれるジャロレー牛用の草地としてどの草種が適するのだろうか。

八雲町営牧場は標高200mの高台にあり、ここからの展望もまたすばらしい。八雲の名の示すごとく、気象条件は良好でなく、春は強風、そして7月まで濃霧がかかるという。八雲酪農の名声はつとに有名であり、町営牧場の草地もさすがと感心した。草地はオーチャードグラス、トールフェ

スク、メドウフェスクおよびシロクローバが混生し、50トン/haの草収量をあげるといふ。マメ科草種が消失すると8月過ぎから草量が減少し、放牧効率が低下すること、放牧管理を合理的に行えば掃除刈の必要がないこと等の説明を承つた。さらに、草地は更新しないで追肥、追播、デスクングによつて20年位維持したいとのことであつた。種々学ぶところが多かつた。

米 米 米

最近、オランダのクラス博士の講演を聞く機会があつたが、オランダではペレニアルライグラスの耐寒性品種の育成によつて草地の大半がペレニアルライグラスで占められるようになったといふ。その特性は、高収量、持続性、早春からの利用そして造成後の利用が早いという点があげられている。道南地方における適応性と利用法をテストする必要があるとさうだ。また、火山降灰物の影響を受け理化学的の劣悪な土壌が多いので、この観点からも適応草種(品種)の選定が必要である。

森林資源の豊富なこの地方では外延的に草地の拡大を図ることは困難なように見受けられたが、温暖な気候を武器にして草地利用の集約度をさらに高めることが可能であらう。道南畜産の確立と発展を期待して止まない。

今回の旅行は始めから終りまで十分な満足を感じたが、幹事の方達のなみなみならぬご努力と現地側のご配慮にもとづくものと深く感謝する次第である。

現地研究会に参加して

田 辺 安 一*

北海道の玄関口である道南地方は、道央以北とは異なつた自然のおよび社会的条件下にあり、主として道東地方しか知らない筆者には未知の地方であつた。今回の現地研究会は、渡島および檜山支庁管内の「草地農業の実態と問題点」がテーマで、日頃この地方の草地農業に関心の深い会員および青森県からの参加者10名、計130余名が、2台のバスに分乗し、3日間に、主要拠点7カ所を視察できたことは、非常に意義深いものであつた。

第1日目は、秋晴れの札幌市テレビ塔下から9時過ぎに出発し、10時半過ぎから余市町のウイスキー工場で、その製造工程を見学後、三股副会長の挨拶、中央農試桜井部長から、特に道南の肉牛飼養の位置づけと放牧期間が200日に及ぶ点を指摘された。往年の栄華がしのばれるニシン御殿での芳潤な香り一杯のウイスキーで、参加者は出発前後の緊張感がほぐれ、一路南下した。ニセコ連峰の山容を心行くまで眺め、長万部でやや遅い昼食をとり、噴火湾を左にして静まりかえつた駒ヶ岳山麓の鹿部村宮牧場に到着したのは夕暗迫る6時少し前であつた。

鹿部村畜産課長の概説によると、この村の肉牛飼養は典型的な沿岸漁家兼業対策で、昭和39年から熊本および秋田県から褐毛和種を323頭導入し、現在450頭(個人20戸で約100頭、協

* 新得畜産試験場